

紅蓮地獄④ 閻魔大王の裁き

極寒で紅蓮華になった男は、全身に銀の糸をからませている。蓮根の穴から出るときに、蓮根の粘った糸が付着したのである。その糸の先端が業風に舞いあがり、天空の黒い雲に吸いこまれ、男はそのまま宙づり状態になった。

「よし、あの雲まで登ってみるか」

男は両腕に渾身をこめた。滑らないように、糸をくると一回転させて、右手首に巻き付けた。その腕に力をこめて全身を持ちあげる。そして、素早く左手をあげて糸を握り、左手首に巻く。右腕、左腕と、男は交互に糸をたぐりよせながら、黒雲をめざして登っていく。

空から周囲を見わたせば、どの糸にも紅蓮地獄から抜け出す連中がぶらさがっている。しかし、ほとんどが雨のように墜落していく。ここでも同じことを本能的に繰り返している。数百年にわたる繰り返しが地獄の試練である。

黒雲の上は閻魔大王の宮殿であった。銀の糸は宮殿の門柱に結ばれている。

そこへ登ってきた男は、黒鬼の案内で大王の前に座らされ、生前に犯した罪の行ないが、浄玻璃に一瞬にして映し出される。

「汝が生前につくった罪業の姿じゃ。よもや忘れてはおらぬな？」

「……」

「間違いないか！」

「……」

突然、雷鳴が青天に響きわたった。大王の一括である。

べつとりと血に塗られた出刃包丁が大写しにされている。生々しい映像を見て、男は両手を小刻みに激しく震わせた。取り返しのつかない罪に号泣して、赤い涙を流している。

「どうか、ご勘弁を……」

泣き崩れてうつむいた途端に、背中が割れた。紅蓮華の蕾がぱくりと開いたのである。

突然、紅蓮華が猛烈に喋りはじめた。

浄玻璃は、男の心の中までは映し出すことができない。その浄玻璃に代わって、紅蓮華が口を開いて男の心模様を喋り始めたのである。これまでの男の虚言や欺瞞、陰謀、貪欲、嫉妬、愚痴、怨念、懈怠、不信、色情、放逸、惰眠など、心の有り様が累々と、しかも一瞬にして暴露された。しかし、男にとっては長時間にわたって聞かされる辛い罪状であった。

「ああ、恥ずかしい」

男は目をつぶり、耳をふさいだ。あまりにも強く両耳を押さえたものだから、目玉が飛び出した。眼球は浄玻璃の正面に転がって静止した。そのまま二つの目玉は、まばたきもせずに画面を凝視している。浄玻璃の映像説明は、紅蓮華が語り部である。生前中の男の行動と心の内面が暴露され、一生涯の行為と意識は、大王の前で洗いざらい明るみに晒された。

閻魔大王の判決文が読まれた。

「汝は犯行をくらすために、四国八十八ヶ所霊場へ逃げこんで足摺岬で逮捕された。遍路には懺悔の気持ちもあったが、しかし、逃亡が第一目的であった。逮捕後は、懲役二十年の実刑を終えて出所し、再び残りの四国八十八ヶ所霊場を歩いた。札所満願の御礼に高野山にも登った。したがって、紅蓮地獄三百年のところを、遍路の懺悔行を情状酌量して、紅蓮地獄三年、月にて仏法聴聞三十年を申し渡す」

大王は卓上の槌を、カン、カン、カンと打った。

甲高い響きと同時に、糸がぷつりと切れ、再び紅蓮地獄へ落ちていった。

難儀をしながら雲に登り、大王の裁きを受けて墜落するまでの時間は、ほんのわずかな経過であった。しかし、男にとっては、雲上の滞在は永劫の裁きに感じられた。

け、け、け、け、け……………